

## わが心の自叙伝

## 菅原洋一

————▷26

「80才の私からあなたへ」から始まったアルバムは81、82歳と毎年続き、デビュー60周年の「85才の私から」ではレコード大賞企画賞を受けた。年が明け、文化庁から「平成三十年文化庁長官表彰」を頂戴した。「永年に亘り歌手として活躍するとともに、音楽文化の普及に努め、我が国の芸術文化の振興に多大な貢献をしている」という表彰理由だった。

ただただ自分が好きなだけで歌ってきたはずの私の歌人生が「芸術文化の振興に貢献」とは、実にありがたい言葉で、それまでの数々の賞とは全く別な感激で胸がいっぱいになった。

ほどなく時代は令和へと変わった。「令和に届ける昭和の歌」として出したアルバム「86才の私から」のタイトルは、「和み」。「なごみ」と読ませた。

## ◆ 歌は希望の糧

日本歌手協会歌の祭典で  
歌う著者(2021年3月)



実際は私のために作られた歌だったものの、同時期、ちょうど「忘れな草をあなたに」がヒットし始め、次の曲にと思っっているうちに石原裕次郎さんがレコーディングしてヒットさせた「恋の町札幌」、今日でお別れの年にレコード大賞を争った岸洋子さんの「希望」など、令和に伝えたい昭和の名作を歌

った。さらに翌年、つまり昨年の「87才の私から」は戦後75年というコンセプトで藤山一郎さんの「長崎の鐘」など終戦後の日本人に希望を与えてくれた先輩歌手の歌を「和みⅡ」として発売した。

ところがそのレコーディングの最中にコロナがまん延、歌えなかった。8月21日に米寿88歳を迎えてくれた。

新しい年が始まったが、コロナの猛威は依然、収まらなかつた。その間、緊急事態宣言が解かれていた4月にコンサートが開催できた。それが神戸だったことは、私に勇気を与えてくれた。ふるさとの新聞でのこの連載も、自らの歩みを思い出させてくれた。

ない日々が続いた。コンサートもすべて順延、中止。歌手人生の中でもっとも暇な日々を送ることになった。「歌でコロナを吹き飛ばそう」と思っても、歌う場所も確保できなかったら、お客さまに集まってももらえない。私たちが歌い手は、やはりお客さまの前で歌ってこそ成り立つのだなというところをつくつくと感じた。同時に、自分は歌うことが本当に好きなのだ、あらためて気づいた1年だった。そんな中での盟友、なかにし礼との別れはさらに自分を見つめ直すことになった。

新しい年が始まったが、コロナの猛威は依然、収まらなかつた。その間、緊急事態宣言が解かれていた4月にコンサートが開催できた。それが神戸だったことは、私に勇気を与えてくれた。ふるさとの新聞でのこの連載も、自らの歩みを思い出させてくれた。

よくこの年まで元気で歌ってきたなあ、自分で自分を褒めてあげたい。そしてこの世に生んでくれた父、全く記憶のない生みの母、そして私を育ててくれた母に感謝したい。いや、私の音楽プロデューサーでもある妻も、そして娘も息子も亡くなった孫もありがとう。私とかかわってくれた、たくさん数えきれない人たちがひとりひとりの力があつてこそ、今の私があるのだ。私はそうして生かされているのだ。

歌は希望の糧である。それは私にとってもあなたにとっても。そんな思いを胸に私は歌えなくなる日まで歌い続けたいと思っているのだ。感謝を込めて。(すがわら・よういち||歌手)||おわり||

## 感謝を胸に名作を歌い継ぐ